

# D. Lanphier: Petersson norms and liftings of Hilbert modular forms の紹介

岡崎 武生 大阪大学

## Introduction

D. Lanphier の結果は次の3パートからなります。

$\mathfrak{H}_{2n}$  上の Siegel-Eisenstein 級数  $E(\mathcal{Z})$  を埋め込み  $\iota: \mathfrak{H}_n \times \mathfrak{H}_n \ni (z, w) \mapsto \begin{pmatrix} z & 0 \\ 0 & w \end{pmatrix} \in \mathfrak{H}_{2n}$  で引き戻したものを  $z \in \mathfrak{H}_n$  の保型形式とみなす。このとき、次数  $n$  の Hecke eigen cuspform  $f(z)$  に対して Petersson 内積を取ると standard  $L$ -関数の特殊値付き倍の  $f(w)$  が得られる、という Pullback formula(定理 1.1) の解説。

Pullback formula と、Siegel-Eisenstein 級数の Fourier 係数は  $\mathbb{Q}$  に含まれるという M. Harris の結果から、 $f$  の standard  $L$ -関数の特殊値の代数性が導かれる。

更に、その特殊値の  $\sigma (\in \text{Aut}(\mathbb{C}/\mathbb{Q}))$  による共役は、 $f^\sigma$  ( $f$  の Fourier 係数の  $\sigma$ -共役を取る事で得られる保型形式) の特殊値に等しいといった性質が導かれる。(定理 2.5) (このような、保型形式から何らかの作業で得た数値を  $\sigma$  で写したものは、元の保型形式の  $\sigma$ -共役から得た数値と等しいという性質を Galois Equivalence Property と呼ぶ。G.E.P と略記する。)

斎藤-黒川リフト (Hecke eigen 楕円保型形式から Hecke eigen Siegel 保型形式を構成する方法) において、preimage と image の standard  $L$ -関数の関係と の G.E.P から、両者の Petersson norm の商が、preimage の Fourier 係数の生成する体に含まれる事と、G.E.P を持つ事がわかる。(定理 3.4) また、斎藤-黒川リフトの Hilbert 保型形式版や池田リフトにおいても同様の事がいえる。(定理 3.5)

## 0 準備

係数環  $A$  の  $2n \times 2n$ -size の行列環  $M_{2n}(A)$  の元  $g = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$  にたいし、 $n \times n$ -size の block 達を  $a_g = a, b_g = b, c_g = c, d_g = d$  と書く事にする。

$k$  を  $[k: \mathbb{Q}] = m$  の総実代数体とし、 $\mathfrak{O}$  で  $k$  の整数環をあらわす。整 ideal  $\mathfrak{n}$  にたいし、次数  $n$  の symplectic group  $Sp_n(\mathfrak{O}) = \{g \in GL_{2n}(\mathfrak{O}) \mid {}^t g \begin{pmatrix} 0 & -1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix} g = \begin{pmatrix} 0 & -1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}\}$  の主合同部分群を  $\Gamma(\mathfrak{n}) = \{\gamma \in Sp_n(\mathfrak{O}) \mid 1 \equiv 0 \pmod{\mathfrak{n}}\}$  であらわす。次数  $n$  の Siegel 上半空間  $\mathfrak{H}_n = \{z = {}^t z \in M_n(\mathbb{C}) \mid \Im z > 0\}$  への  $g \in Sp_n(\mathbb{R})$  の作用を  $g(z) := (a_g z + b_g)(c_g z + d_g)^{-1}$  とする。保型因子を  $j(g, z) := \det(c_g \cdot z + d_g)^{-1}$  と定義する。次数  $n$ 、重さ  $\kappa$ 、合同部分群

$\Gamma \subset Sp_n(\mathfrak{D})$  に関する、(classical) 正則 Hilbert Siegel 保型形式  $F$  とは、全ての  $z \in \mathfrak{H}_n^m, \gamma \in \Gamma$  に対して

$$F(\gamma(z))j(\gamma, z)^\kappa = F(z)$$

を満たす  $\mathfrak{H}_n^m$  上の正則関数の事である。但し、ここでは  $\gamma \cdot z = (\gamma_1 \cdot z_1, \dots, \gamma_m \cdot z_m)$ , ( $\gamma_j$  は  $\gamma \in Sp_n(k)$  の  $j$  番目の共役)  $j(\gamma, z)^\kappa = \prod_j j(\gamma_j, z_j)^\kappa$  という意味で使っている。  $M_\kappa(\Gamma) = M_\kappa(\Gamma)$  でこのような関数全体の空間をあらわす。

この classical な  $F \in M_\kappa(\Gamma)$  は強近似定理 ( $Sp_n(k)Sp_n(\mathbb{R})^m$  は  $Sp_n(\mathbb{A}_k)$  の稠密集合) により idèle 群  $Sp_n(\mathbb{A}_k)$  上の関数に次の様にして拡張できる。

なお、 $\mathbb{A}_k$ -module  $M$  の元  $x$  にたいし、 $x_\infty, x_0$  で  $x$  の無限 part, 有限 part をあらわすことにする。まず、 $\tilde{f}(g_\infty) = F(g_\infty(i)) \det(a_{g_\infty} + ib_{g_\infty})^\kappa, g_\infty \in Sp_n(\mathbb{R})^m$  で、 $Sp_n(\mathbb{R})^m$  上の関数に拡張する。  $\Gamma(\mathfrak{n})$  を  $\Gamma$  に含まれる最大の主合同部分群とし、 $g \in Sp_n(\mathbb{A}_k)$  に対して、強近似定理により

$$g = \delta g_\infty u, \delta \in Sp_n(k), g_\infty \in Sp_n(\mathbb{R})^m, u \in \prod_{v < \infty} \Gamma(\mathfrak{n})_v$$

と表示して、 $f(g) = \tilde{f}(g_\infty)$  とおく。  $Sp_n(\mathbb{A}_k)$  上の関数  $f$  は、全ての  $\delta \in Sp_n(k), g \in Sp_n(\mathbb{A}_k), u_\infty \in \mathbf{K}_\infty^m, u_0 \in \prod_v \Gamma_n(\mathfrak{n})_v$  に対して

$$f(\delta g u_\infty u_0) = f(g) \det(a_{u_\infty} + ib_{u_\infty})^\kappa,$$

を満たす。ここで  $\mathbf{K}_\infty (\subset Sp_n(\mathbb{R}))$  は  $i$  を固定する compact maximal subgroup をあらわしている。

このように  $F \in M_\kappa(\Gamma)$  から得られた  $Sp_n(\mathbb{A}_k)$  上の関数  $f$  全体も同じ  $M_\kappa(\Gamma)$  であらわす。この拡張の仕方は無矛盾で、 $f$  から  $F$  が再現可能である。本稿では、もっぱら  $Sp_n(\mathbb{A}_k)$  上の関数を扱う事にする。

$f$  の Fourier 係数を次の様に定義する。

**定義 1 (Fourier 係数)** まず、 $\mathbb{A}_\mathbb{Q}$  上の指標  $\psi_0$  を  $\psi_0(x) = \exp(2\pi i x), x \in \mathbb{R}$  から、強近似定理で拡張し、 $\mathbb{A}_k$  上の指標を  $\psi = \psi_0 \circ Tr_{k/\mathbb{Q}}$  で定義する。

すると、 $T = {}^t T \in M_n(k)$  に関する  $f$  の (whole) Fourier 係数  $W_{f, T}(g), g \in Sp_n(\mathbb{A}_k)$  は

$$W_{f, T}(g) := \int_{U(k) \backslash U(\mathbb{A}_k)} \bar{\psi}(\text{Trace}(Tx)) f(u(x)g) dx$$

と定義される。ここで、 $U = \{u(x) = \begin{pmatrix} 1 & x \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \mid x \text{ は対称行列} \}$  で  $U(k) \backslash U(\mathbb{A}_k)$  の volume が 1 となる様に Haar 測度  $dh$  を取っている。更に、 $f$  は正則な  $F$  から得られているので、 $g = \begin{pmatrix} a & 0 \\ 0 & {}^t a^{-1} \end{pmatrix} \in Sp_n(\mathbb{A}_k) \mid a \in GL_n(\mathbb{A}_k)$  において、

$$W_{f, T}(g) = V_{f, T}(a_0) (\det a_\infty)^\kappa \exp(-2\pi \text{Trace}(T a_\infty {}^t a_\infty))$$

と書ける。(ここで  $a_\infty, a_0$  は  $a$  の無限 part, 有限 part をあらわしている。)

我々はこの  $a_0$  のみに依存する関数  $V_{f, T}(a_0)$  を  $f$  の Fourier 係数とよぶ。特に  $a_0 = 1_0$  のとき、 $V_{f, T}(1_0)$  は classical な  $F$  の Fourier 係数。  $\square$

$f \in M_\kappa(\Gamma)$  が全ての非正値な  $T$  において  $V_{f, T}(a_0) = 0$  となるとき、 $f$  は cuspform であるという。 $M_\kappa(\Gamma)$  の cuspform 全体の部分空間を  $S_\kappa(\Gamma)$  であらわす。

次に、Hecke 作用素と standard  $L$ -関数の定義を復習する。(c.f. [17])

**定義 2 (Hecke 環、Hecke 作用素)** 有限素点  $v$  における Hecke 環  $H_v(Sp_n(k_v), Sp_n(\mathfrak{O}_v))$  を、 $\eta(k_1 g k_2) = \eta(g)$ ,  $k_i \in Sp_n(\mathfrak{O}_v)$ ,  $g \in Sp_{2n}(k_v)$  で compact support を持ち連続となるような関数  $\eta$  全体とし、convolution 積  $*$  を  $\eta_1 * \eta_2(g) := \int_{Sp_n(k_v)} \eta_1(gh^{-1})\eta_2(h)dh$  と入れる。(  $dh$  は  $Sp_n(\mathfrak{O}_v)$  を 1 とする Haar 測度 )

この時、Hecke 作用素  $T_\eta, \eta \in H_v(Sp_n(k_v), Sp_n(\mathfrak{O}_v))$  を

$$T_\eta f(g) := \int_{Sp_n(k_v)} f(gh^{-1})\eta(h) dh$$

と定義する。 $f \in M_\kappa(\Gamma(\mathfrak{n}))$  が、全ての  $v \nmid \mathfrak{n}$  で全ての  $\eta \in H_v(Sp_n(k_v), Sp_n(\mathfrak{O}_v))$  に対して、 $T_\eta f = \lambda_v(\eta)f$ ,  $\lambda_v(\eta) \in \mathbb{C}$  となるとき Hecke eigenform という。 $\lambda_f$  で  $f$  に付随する準同型  $\otimes_{v \nmid \mathfrak{n}} H_v(Sp_n(k_v), Sp_n(\mathfrak{O}_v)) \rightarrow \mathbb{C}$  をあらわす。(  $H_v(Sp_n(k_v), Sp_n(\mathfrak{O}_v))$  は佐武同型により可換代数である。 )  $\square$

$\dim_{\mathbb{C}} S_\kappa(\Gamma(\mathfrak{n})) < \infty$  で、 $T_\eta$  は  $S_\kappa(\Gamma(\mathfrak{n}))$  への adjoint 作用素であるから、 $S_\kappa(\Gamma(\mathfrak{n}))$  は eigenforms で張れる事と、 $\lambda_v(\eta)$  は totally algebraic である事がわかる。また、2 節で  $\{\lambda_f(\eta) \mid \eta \in \otimes_{v \nmid \mathfrak{n}} H_v(Sp_n(k_v), Sp_n(\mathfrak{O}_v))\}$  の生成する体が有限次総実体である事もわかる。

**定義 3 (Satake parameter、standard  $L$ -関数)** 佐武同型により、

$$S_U : H_v(Sp_n(k_v), Sp_n(\mathfrak{O}_v)) \simeq \mathbb{C}[X_1^\pm, \dots, X_n^\pm]^W$$

である事が知られている。右辺は Weyl 群  $W$  による多項式環  $\mathbb{C}[X_1^\pm, \dots, X_n^\pm]$  の不変元全体。 $W$  は  $n$  次対称群  $\mathfrak{S}_n$  と  $w_i : X_i \rightarrow X_i^{-1}$  で生成される。

次の意味で、佐武同型が  $f$  から誘導する parameter  $\{\alpha_1^{\pm 1}, \dots, \alpha_n^{\pm 1}\}$  を  $f$  の ( $v$  における) Satake parameter と呼ぶ。 $S_U(\eta) = p(X_1, \dots, X_n)$  ならば、 $T_\eta f = p(\alpha_1, \dots, \alpha_n)f$ 。また、 $f$  の standard  $L$ -関数  $L_S(s, f)$  は

$$L_S(s, f) := \prod_{v \notin S} \left( (1 - q^{-s}) \prod_{i=1}^n (1 - \alpha_i q^{-s})(1 - \alpha_i^{-1} q^{-s}) \right)^{-1}, \quad q = N_{k/\mathbb{Q}}(v)$$

と定義する。ここで  $S = \{\infty_j\}_{1 \leq j \leq m} \cup \{v < \infty \mid v \mid \mathfrak{n}\}$  なる素点集合である。  $\square$

## 1 Pullback formula

まず最初に、Pullback formula の土台となる、 $k$  上の次数  $2n$  の正則 Hilbert Siegel Eisenstein series  $E_{2n}(g; \kappa, \mathfrak{n}, \theta) \in M_\kappa^{2n}(\Gamma(\mathfrak{n}))$ ,  $\kappa > 2n + 1$  を定義する。

それは、各素点  $v$  において Eisenstein kernel  $\varepsilon_v$  を以下の様に指定する事で定義される。(  $v$  が無限素点のとき )

$u \in \mathbf{K}_\infty$  にたいして

$$\rho_\kappa(u) := \det(a_u + i_{2n} b_u)^\kappa$$

とし、 $g = (g_j) \in Sp_{2n}(\mathbb{R})^m$  を  $g_j = \begin{pmatrix} 1 & S_j \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} A_j & 0 \\ 0 & {}_t A_j^{-1} \end{pmatrix} u_j, u_j \in \mathbf{K}_\infty$  と岩沢分解して

$$\varepsilon_\infty(g, \kappa) := \prod_{j=1}^m |\det(A_j)|_v^\kappa \rho_\kappa(u_j)$$

( $v \nmid \mathbf{n}$  な有限素点のとき)

$g \in Sp_{2n}(k_v) = \begin{pmatrix} 1 & S \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} A & 0 \\ 0 & {}_t A^{-1} \end{pmatrix} u, u \in Sp_{2n}(\mathfrak{O}_v)$  と岩沢分解して、

$$\varepsilon_v(g; \kappa, \mathbf{n}) := |\det(A)|_v^\kappa,$$

( $v \mid \mathbf{n}$  な有限素点のとき)

$g \in Sp_{2n}(k_v)$  が、 $g = pu, p \in P_{2n}(k_v), u \in \Gamma_{2n}(\mathfrak{n}_v)$  と書けるとき、

$$\varepsilon_v(g; \kappa, \mathbf{n}) := |\det(A)|_v^\kappa,$$

それ以外では zero。

以上、各  $\varepsilon_v$ 、 $v < \infty$  の定義はこれで十分なのだが、後の computation の為、以下のように異なる定義の仕方を与える。

$$\varepsilon_v(g_v; \kappa, \mathbf{n}) := \beta^{-1} \int_{GL_{2n}(k_v)} |\det(t)|^\kappa \phi_v(t(0_{2n}, 1_{2n})g_v) dt.$$

ここで、 $v \neq \mathbf{n}$  のとき、 $\phi_v$  は  $M_{2n \times 4n}(\mathfrak{O}_v)$  の特性関数。 $v \mid \mathbf{n}$  のとき、 $\phi_v$  は  $\{(u, v) \equiv (0_{2n}, 1_{2n}) \pmod{\mathfrak{n}_v}\}$  の特性関数。 $\beta \in \mathbb{C}^\times$  で  $\varepsilon_v(1; \kappa, \mathbf{n}) = 1$  となる様に調整しておく。

すると、global な Eisenstein kernel  $\varepsilon$  を  $\varepsilon(g; \kappa, \mathbf{n}) = \varepsilon_\infty(g; \kappa) \times \prod_{v: \text{finite}} \varepsilon_v(g; \kappa, \mathbf{n})$  とおいて、Eisenstein series は

$$E_{2n}(g; \kappa, \mathbf{n}, \theta) := \sum_{\gamma \in P_{2n}(k) \backslash Sp_{2n}(k)} \varepsilon(\gamma g \theta; \kappa, \mathbf{n}), \quad g \in Sp_{2n}(\mathbb{A}_k)$$

と定義される。(  $P_{2n}$  は Siegel parabolic subgroup) 但し、我々は今後の computation の為、 $E_{2n}$  を以下の  $\theta \in \prod_{v < \infty} Sp_{2n}(\mathfrak{O}_v)$  で動かした。 $\theta$  は  $v \nmid \mathbf{n}$  の成分を 1、 $v \mid \mathbf{n}$  の成分を  $\theta_v$  により

$$(0_{2n}, 1_{2n})\theta_v^{-1} = \begin{pmatrix} 1_n & 1_n & 0 & 0 \\ 0 & 0 & -1_n & 1_n \end{pmatrix}$$

となる様にとる。(とれる。また、 $\theta \in \prod_{v < \infty} Sp_{2n}(\mathfrak{O}_v)$  の取り方によらず、 $E_{2n}(g; \kappa, \mathbf{n}, \theta) \in M_\kappa(\Gamma(\mathbf{n}))$  :

$$E(\delta g u; \kappa, \mathbf{n}, \theta) = E(g; \kappa, \mathbf{n}, \theta)$$

が任意の  $\delta \in Sp_{2n}(k)$ ,  $g \in Sp_{2n}(\mathbb{A}_k)$ ,  $u \in \Gamma(\mathbf{n})_v, v < \infty$  に対して成立する。) 埋め込み  $\iota: Sp_n \times Sp_n \rightarrow Sp_{2n}$  を

$$\iota: Sp_n \times Sp_n \ni \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \times \begin{pmatrix} a' & b' \\ c' & d' \end{pmatrix} \longmapsto \begin{pmatrix} a & 0 & b & 0 \\ 0 & a' & 0 & b' \\ c & 0 & d & 0 \\ 0 & c' & 0 & d' \end{pmatrix} \in Sp_{2n}$$

とし、この  $\iota$  で引き戻す事で Eisenstein series を  $Sp_n(\mathbb{A}_k) \times Sp_n(\mathbb{A}_k)$  の保型形式と見なす。  
この引き戻した  $E_{2n}((g_1, g_2); \kappa, \mathbf{n}, \theta)$  を、以後  $E(g_1, g_2)$  と書くことにする。

Petersson 内積を、少なくとも一方は cuspform のペア  $f_1, f_2 \in M_\kappa^n(\Gamma(\mathbf{n}))$  に対して

$$\langle f_1, f_2 \rangle := \int_{Sp_n(k) \backslash Sp_n(\mathbb{A}_k)} f_1(g) \overline{f_2(g)} dg$$

( $dg$  は各  $K_v = \mathbf{K}_\infty$ 、 $Sp_n(\mathfrak{O}_v)$  の volume を 1 とする Haar 測度。) と定義する。

$Sp_n(\mathbb{A})$  における involution  $\natural$  を  $g^\natural = \begin{pmatrix} -1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} g \begin{pmatrix} -1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$  とおき、 $S_\kappa(\Gamma(\mathbf{n}))$  における involution  $\natural$  (C-anti linear) を

$$\natural : f(g) \mapsto f^\natural(g) = \overline{f(g^\natural)}$$

とする。 $f^\natural$  の Fourier 係数は  $f$  のその複素共役 (定義 1 から従う。)

すると Pullback formula は次の様に述べられる。

**定理 1.1 (Pullback formula)**  $f \in S_\kappa(\Gamma(\mathbf{n}))$  を Hecke eigenform とする。 $f(g_1)$  と  $E(g_1, g_2)$  との Petersson 内積を取ると、

$$\begin{aligned} \langle E(g_1, g_2), f(g_1) \rangle &= [Sp_{2n}(\mathfrak{O}) : \Gamma(\mathbf{n})]^{-1} (i^{n\kappa} 2^{\frac{(n^2+3n)}{2} - n\kappa + 1} \pi^{n(n+1)/2})^m \\ &\quad \times \left( \frac{\nu(\kappa - \frac{(n+1)}{2})}{\nu(\kappa)} \right)^m \frac{L_S(\kappa - n, f) f^\natural(g_2)}{\zeta_S(\kappa) \prod_{j=1}^n \zeta_S(2\kappa - 2j)} \end{aligned} \quad (1.1)$$

ここで、 $\nu(s) = \prod_{j=1}^n \Gamma(s - \frac{(j-1)}{2})$  とガンマ関数の積で書かれる  $s$  の関数である。  $\square$

以下、この Pullback formula の得られる課程を見ていく。

$$\xi_j = \begin{pmatrix} 1_n & 0_n & 0_n & 0_n \\ 0_n & 1_n & 0_n & 0_n \\ 0_n & \text{diag}[0_{n-j}, 1_j] & 1_n & 0_n \\ \text{diag}[0_{n-j}, 1_j] & 0_n & 0_n & 1_n \end{pmatrix} \quad j \neq n, \quad \xi_n = \begin{pmatrix} 0_n & 0_n & -1_n & 0_n \\ 0_n & 1_n & 0_n & 0_n \\ 1_n & 1_n & 0_n & 0_n \\ 0_n & 0_n & -1_n & 1_n \end{pmatrix}$$

とおくと、次が成立する。

**補題 1.2 (Garrett [6], [8])**  $\mathcal{K}$  を任意の可換体とする。 $Sp_{2n}(\mathcal{K})$  は次の軌道分解を持つ。

$$Sp_{2n}(\mathcal{K}) = \bigsqcup_{1 \leq j \leq n} P_{2n}(\mathcal{K}) \xi_j \cdot \iota(Sp_n(\mathcal{K}) \times Sp_n(\mathcal{K})) \quad (1.2)$$

そして、 $\xi_j$  の isotropy group

$$\Xi_j = \{(g_1, g_2) \in Sp_n(\mathcal{K}) \times Sp_n(\mathcal{K}) \mid P_{2n}(\mathcal{K}) \xi_j \cdot \iota(g_1, g_2) = P_{2n}(\mathcal{K}) \xi_j\}$$

は、特に  $j = n$  のとき

$$\Xi_n = \{(g, g^\natural)\} \cong Sp_n(\mathcal{K}) \quad (1.3)$$

が成立する。  $\square$

$\iota$  で引き戻された  $E(g_1, g_2)$  は、上の分解 (1.2) に沿って

$$\begin{aligned} E(g_1, g_2) &= \sum_{0 \leq j \leq n} \omega_j(g_1, g_2), \\ \omega_j(g_1, g_2) &= \sum_{\gamma \in \Xi_j \backslash Sp_n(k) \times Sp_n(k)} \varepsilon(\xi_j \gamma(g_1, g_2) \theta; \kappa, \mathbf{n}) \end{aligned}$$

と部分級数に分解されるが、次が成立する。

**補題 1.3**  $1 \leq j \leq n-1$  ならば、 $\omega_j(g_1, g_2) = 0$  □

(証明)  $1 \leq j \leq n-1$  の範囲で、 $v \mid \mathbf{n}$  において

$$\varepsilon_v(\xi_j \iota(g_1, g_2) \theta; \kappa, \mathbf{n}) = \beta^{-1} \int_{GL_{2n}(k_v)} |\det(t)|^\kappa \phi_v(t(0_{2n}, 1_{2n}) \xi_j \iota(g_1, g_2) \theta) dt \quad (1.4)$$

が zero である事を示せば良い。実際、 $t \in GL_{2n}(k_v), g_1, g_2 \in Sp_n(k_v)$  に対して積分内の関数が nonzero である為には、 $(\phi_v$  は  $\{(u, v) \equiv (0_{2n}, 1_{2n}) \pmod{\mathbf{n}_v}\}$  の特性関数であるから)

$$t(0_{2n}, 1_{2n}) \xi_j \iota(g_1, g_2) \equiv (0_{2n}, 1_{2n}) \theta^{-1} \pmod{\mathbf{n}_v}$$

である事が必要。これは、

$$t \begin{pmatrix} 0 & \text{diag}[0_{n-j}, 1_j] & 1_n & 0 \\ \text{diag}[0_{n-j}, 1_j] & 0 & 0 & 1_n \end{pmatrix} \iota(g_1, g_2) \equiv \begin{pmatrix} 1_n & 1_n & 0 & 0 \\ 0 & 0 & -1_n & 1_n \end{pmatrix} \pmod{\mathbf{n}_v}$$

だが、この両辺の  $2n \times 4n$ -size の行列から  $1 \sim n$  列と  $2n+1 \sim 3n$  列を取り出すと、

$$t \begin{pmatrix} 0 & 1_n \\ \text{diag}[0_{n-j}, 1_j] & 0 \end{pmatrix} g_1 \equiv \begin{pmatrix} 1_n & 0 \\ 0 & -1_n \end{pmatrix} \pmod{\mathbf{n}_v}$$

となる。しかし、両辺の rank は異なっているので、(1.4) 積分内の関数は常に zero。 (証終)

補題 1.3 から、Pullback formula (1.1) の左辺は、結局

$$\langle E(g_1, g_2), f(g_1) \rangle = \langle \omega_n(g_1, g_2), f(g_1) \rangle \quad (1.5)$$

なので、以下、(1.5) の右辺を計算していく。unfolding method により、

$$\begin{aligned} &\langle \omega_n(g_1, g_2), f(g_1) \rangle \\ &= \int_{Sp_n(k) \backslash Sp_n(\mathbb{A}_k)} \sum_{\gamma \in \Xi_n \backslash Sp_n(k)^2} \varepsilon_\infty(\xi_n \gamma(g_1, g_2), \kappa) \varepsilon_0(\xi_n \gamma(g_1, g_2); \kappa, \mathbf{n}) \overline{f(g_1)} dg_1, \\ &= \int_{Sp_n(\mathbb{A}_k)} \varepsilon_\infty(\xi_n(g_1, g_2); \kappa) \varepsilon_0(\xi_n(g_1, g_2); \kappa, \mathbf{n}) \overline{f(g_1)} dg_1 \end{aligned}$$

ここで、 $\varepsilon_v, \varepsilon_0 = \prod_{v: \text{finite}} \varepsilon_v$  をあらわし、 $f$  は  $Sp_n(k)$ -left invariant な事を用いている。(1.3) を用いて

$$= \int_{Sp_n(\mathbb{A}_k)} \varepsilon_\infty(\xi_n((g_2^\natural)^{-1} g_1, 1); \kappa) \varepsilon_0(\xi_n((g_2^\natural)^{-1} g_1, 1); \kappa, \mathbf{n}) \overline{f(g_1)} dg_1$$

変数を  $g_1 \rightarrow (g_2^{\natural})^{-1}g_1$  とずらす事で

$$\begin{aligned} &= \int_{Sp_n(\mathbb{A}_k)} \varepsilon_{\infty}(\xi_n g_{1\infty}, 1; \kappa) \varepsilon_0(\xi_n(g_{1,0}, 1); \kappa, \mathbf{n}) \overline{f(g_2^{\natural}g_1)} dg_1 \\ &= \left( \prod_v T_v \right) f(g_2) \end{aligned}$$

と local factor の積に分解できる。各  $T_v$  は次のような convolution operator である。

$$T_v f(g_2) := \int_{Sp_n(k_v)} \varepsilon_v(\xi_n(g_{1v}, 1); \kappa, \mathbf{n}) \overline{f(g_2^{\natural}g_{1v})} dg_{1v}.$$

では、各  $T_v$  の計算を行う。

( $v = \infty$  の場合)

$$\begin{aligned} T_v f(g_2) &= \int_{Sp_n(\mathbb{R})^m} \varepsilon_v(\xi_n(g_{1v}, 1); \kappa) \overline{f(g_2^{\natural}g_{1v})} dg_{1v} \\ &= \int_{Sp_n(\mathbb{R})^m} \varepsilon_v(\xi_n((g_{2v}^{\natural})^{-1}g_{1v}, 1); \kappa) \overline{f(g_{2,0}^{\natural}g_{1v})} dg_{1v} \quad (g_{1v} \rightarrow g_{2v}^{\natural}g_{1v} \text{ と変数変換}) \\ &= \int_{Sp_n(\mathbb{R})^m} \varepsilon_v(\xi_n(g_{1v}, g_{2v}); \kappa) \overline{f(g_{2,0}^{\natural}g_{1v})} dg_{1v} \quad ((1.3) \text{ を使う}) \end{aligned}$$

積分内が右  $\mathbf{K}_{\infty}^m$  不変なので、 $\mathfrak{H}_n^m \simeq Sp_n(\mathbb{R})^m / \mathbf{K}_{\infty}^m$  上の積分に帰着できる。

$$g_{1v} = \begin{pmatrix} 1 & x \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} y^{1/2} & 0 \\ 0 & t y^{-1/2} \end{pmatrix}, \quad g_{2v} = \begin{pmatrix} 1 & u \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} v^{1/2} & 0 \\ 0 & t v^{-1/2} \end{pmatrix}$$

とすると、 $g_{1v}(i) = x+iy$ ,  $g_{2v}(i) = u+iv$  になる。この  $g_{1v}, g_{2v}$  にたいして、 $\varepsilon_v(\xi_n(g_{1v}, g_{2v}); \kappa) = (\det y)^{\kappa/2} (\det v)^{\kappa/2} (\det z + w)^{-\kappa}$ ,  $z = x + iy$ ,  $w = u + iv$  と書ける事と  $F(x + iy) = (\det y)^{-\kappa/2} f(g_{2,0}^{\natural}g_{1v})$  は、 $f(g_{2,0}^{\natural}g_1)$  に対応する classical な保型形式である事から、

$$\int_{Sp_n(\mathbb{R})^m} \varepsilon_v(\xi_n(g_{1v}, g_{2v}); \kappa) \overline{f(g_{2,0}^{\natural}g_{1v})} dg_{1v} = 2(\det v)^{\kappa/2} \int_{\mathfrak{H}_n^m} \det(z + w)^{-\kappa} \overline{F(z)} (\det y)^{\kappa} \frac{dx dy}{(\det y)^{n+1}}$$

と計算できる。さらに  $F(z) = \sum_T V_{f,T}(1_0) \exp(2\pi i \text{Trace}(Tz))$ , ( $T$  は totally positive definite な対称行列を走る) と classical な Fourier 展開をすると、

$$\begin{aligned} &2(\det v)^{\kappa/2} \int_{\mathfrak{H}_n^m} \det(z + w)^{-\kappa} \overline{F(z)} (\det y)^{\kappa} \frac{dx dy}{(\det y)^{n+1}} \\ &= \sum_T \overline{V_{f,T}(1_0)} (\det v)^{\kappa/2} \int_{\mathfrak{H}_n^m} \det(z + w)^{-\kappa} (\det y)^{\kappa} \exp(2\pi \text{Trace}(T(-ix - y))) \frac{dx dy}{(\det y)^{n+1}} \\ &= \sum_T \overline{V_{f,T}(1_0)} (\det v)^{\kappa/2} \exp(2\pi i \text{Trace}(Tw)) \\ &\quad \times \left( \frac{(-1)^{n\kappa/2} 2^{(n^2+3n)/2 - n\kappa + 1} \pi^{n(n+1)/2} \nu_n(\kappa - (n+1)/2)}{\nu_n(\kappa)} \right) \\ &= f^{\natural}(g_2) \left( \frac{(-1)^{n\kappa/2} 2^{(n^2+3n)/2 - n\kappa + 1} \pi^{n(n+1)/2} \nu_n(\kappa - (n+1)/2)}{\nu_n(\kappa)} \right) \end{aligned}$$

となる。(  $\nu_n$  の定義は定理 1.1 参照)

(  $v \nmid \mathfrak{n}$  の有限素点の場合)

$$\xi_n = \xi'_n \cdot \iota(w, 1), \quad \xi'_n = \begin{pmatrix} 1_n & 0_n & 0_n & 0_n \\ 0_n & 1_n & 0_n & 0_n \\ 0_n & 1_n & 1_n & 0_n \\ 1_n & 0_n & 0_n & 1_n \end{pmatrix}, \quad w = \begin{pmatrix} 0 & -1_n \\ 1_n & 0 \end{pmatrix}$$

である事から、  $\varepsilon_v(\xi_n(g_{1v}, 1); \kappa, \mathfrak{n}) = \varepsilon_v(\xi'_n(w, 1)(g_{1v}, 1); \kappa, \mathfrak{n})$  は

$$\varepsilon_v(\xi'_n(wg_{1v}, 1); \kappa, \mathfrak{n}) = \varepsilon_v(\xi'_n(g_{1v}, w^\natural); \kappa, \mathfrak{n}) = \varepsilon_v(\xi'_n(g_{1v}, 1); \kappa, \mathfrak{n})$$

と書けるので ((1.3) を用いた。),

$$T_v f(g_2) = \int_{Sp_n(k_v)} \varepsilon_v(\xi'_n(g_{1v}, 1); \kappa, \mathfrak{n}) \overline{f(g_2^\natural g_{1v})} dg_{1v}$$

となる。しかし、 [12] の Good prime での computation(c.f. [14]) にあるように、佐武同型が

$$S_U : T_v \longrightarrow \frac{(1 - q^{-\kappa}) \prod_{j=1}^n (1 - q^{2j-2\kappa})}{(1 - q^{n-\kappa}) \prod_{j=1}^n (1 - X_j q^{n-\kappa})(1 - X_j^{-1} q^{n-\kappa})} \in \mathbb{C}[[X_1, \dots, X_n]]^W,$$

(  $q = N_{k/\mathbb{Q}}(v)$  ) を誘導する。従って、  $T_v f(g_2) = \frac{L_v(\kappa-n, f)}{\zeta_{k,v}(\kappa) \prod_{j=1}^n \zeta_{k,v}(2\kappa-2j)} f^\natural(g_2)$ 。

(  $v \mid \mathfrak{n}$  の有限素点の場合)

$$\varepsilon_v(\iota(g_1, 1)\theta; \kappa, \mathfrak{n}) = \beta^{-1} \int_{GL_{2n}(k_v)} |\det(t)|^\kappa \phi_v(t(0_{2n}, 1_{2n})\iota(g_1, 1)\theta) dt$$

であるが、  $\phi_v$  が nonzero である為には

$$t(0_{2n}, 1_{2n})\iota(g_1, 1) \equiv (0_{2n}, 1_{2n})\theta^{-1} = \begin{pmatrix} 1_n & 1_n & 0 & 0 \\ 0 & 0 & -1_n & 1_n \end{pmatrix} \pmod{\mathfrak{n}_v} \quad (1.6)$$

である事が必要。この行列から  $1 \sim n$  列と  $2n+1 \sim 3n$  列、  $n+1 \sim 2n$  列と  $3n+1 \sim 4n$  列を取り出して、 (1.6) は

$$t \begin{pmatrix} 1_n & 0 \\ 0 & -1_n \end{pmatrix} g_1 \equiv \begin{pmatrix} 1_n & 0 \\ 0 & -1_n \end{pmatrix}, \quad t \begin{pmatrix} 1_n & 0 \\ 0 & 1_n \end{pmatrix} \equiv \begin{pmatrix} 1_n & 0 \\ 0 & 1_n \end{pmatrix} \pmod{\mathfrak{n}_v}$$

と書ける。従って、  $g_1 \in \Gamma(\mathfrak{n})_v$  のとき  $\varepsilon(\iota(g_1, 1); \kappa, \mathfrak{n}) = 1$ 、  $g_1 \notin \Gamma(\mathfrak{n})_v$  なら  $\varepsilon(\iota(g_1, 1); \kappa, \mathfrak{n}) = 0$  となり、  $T_v f^\natural = [\Gamma(1)_v : \Gamma(\mathfrak{n})_v]^{-1} f^\natural$  がわかる。

以上で定理 1.1 が得られたが、この定理は明らかに次に同値である。

**定理 1.4 (Pullback formula (II))** 記号、仮定は定理 1.1 と同じとする。  $S_\kappa(\Gamma(\mathfrak{n}))$  の、 Hecke eigenform からなる orthogonal basis  $\mathcal{B}$  にたいして、

$$E(g_1, g_2) = \omega_n(g_1, g_2) = \sum_{f \in \mathcal{B}} c_{\lambda_f} \frac{f(g_1) f^\natural(g_2)}{\langle f, f \rangle} \quad (1.7)$$

但し、  $c_{\lambda_f} = [Sp_{2n}(\mathfrak{O}) : \Gamma(\mathfrak{n})]^{-1} (i^{n\kappa} 2^{\frac{(n^2+3n)}{2} - n\kappa + 1} \pi^{n(n+1)/2})^m \left( \frac{\nu(\kappa - \frac{(n+1)}{2})}{\nu(\kappa)} \right)^m \frac{L_S(\kappa-n, f) f^\natural(g_2)}{\zeta_S(\kappa) \prod_{j=1}^n \zeta_S(2\kappa-2j)}$  で nonzero。 (nonzero である事の解説は [14] 参照。 )  $\square$



## 2 Galois Equivalence Property

今後の結果を得る為に、次の M. Harris による定理を引用する。

**定理 2.1 (Harris [9])** 任意の  $\theta \in \prod_{v < \infty} Sp_{2n}(\mathfrak{O}_v)$  にたいして、 $E(g; \kappa, \mathbf{n}, \theta)$  の Fourier 係数は  $\mathbb{Q}$  の最大 Abel 拡大  $\mathbb{Q}_{ab}$  に含まれ、任意の  $\sigma \in Gal(\mathbb{Q}_{ab}/\mathbb{Q})$  に対して次が成立する。

$$E(g; \kappa, \mathbf{n}, \theta)^\sigma = E(g; \kappa, \mathbf{n}, \theta^\sigma).$$

左辺の  $\sigma$  は Fourier 係数に  $\sigma$  を作用させるという意味で、右辺の  $\theta^\sigma$  の定義は次の通り。類体論により、 $Gal(\mathbb{Q}_{ab}/\mathbb{Q}) \ni \sigma \rightarrow \alpha \in \prod_{p < \infty} \mathbb{Z}_p^\times$  を対応させ、 $\tilde{\sigma} = \begin{pmatrix} \alpha \cdot 1_{2n} & 0 \\ 0 & 1_{2n} \end{pmatrix}$  とおき、 $\theta^\sigma = \tilde{\sigma} \theta \tilde{\sigma}^{-1}$ 。□

Harris の定理により、

**命題 2.2** 前節で指定した  $E(g; \kappa, \mathbf{n}, \theta)$  の Fourier 係数は  $\mathbb{Q}$  に含まれる。従って  $\iota$  で引き戻した  $E(g_1, g_2)$  の Fourier 係数も  $\mathbb{Q}$  に含まれる。□

(証明) Bad prime  $v \mid \mathbf{n}$  において、 $\varepsilon_v(g\theta; \kappa, \mathbf{n}) = \varepsilon_v(g\theta^\sigma; \kappa, \mathbf{n})$  を言えば良い。

$$\varepsilon_v(g_v \theta^\sigma; \kappa, \mathbf{n}) = \int_{GL_{2n}(k_v)} |\det(t)|^\kappa \phi_v(t(0_{2n}, 1_{2n})g_v \theta^\sigma) dt$$

で、右辺の積分内の関数が nonzero である為には、 $t(0_{2n}, 1_{2n})g_v \theta^\sigma$  が  $(0_{2n}, 1_{2n})$  に modulo  $\mathfrak{n}_v$  で合同でなければならない。それは、

$$t(0_{2n}, 1_{2n})g_v \equiv (0_{2n}, 1_{2n})(\theta^\sigma)^{-1} \pmod{\mathfrak{n}_v}$$

に同値だが、右辺は  $(0_{2n}, 1_{2n})(\theta^\sigma)^{-1} = (0_{2n}, 1_{2n})(\tilde{\sigma} \theta \tilde{\sigma}^{-1})^{-1} = (0_{2n}, 1_{2n}) \tilde{\sigma} \theta^{-1} \tilde{\sigma}^{-1}$  で

$$\begin{pmatrix} 1_n & 1_n & 0 & 0 \\ 0 & 0 & -1_n & 1_n \end{pmatrix} \tilde{\sigma}^{-1} = \begin{pmatrix} \alpha_p^{-1} 1_n & \alpha_p^{-1} 1_n & 0 & 0 \\ 0 & 0 & -1_n & 1_n \end{pmatrix}$$

と計算できる。そこで  $t \rightarrow t \begin{pmatrix} \alpha_p^{-1} 1_{2n} & 0 \\ 0 & 1_{2n} \end{pmatrix}$  と変数変換する事で、 $|\alpha_p|_v = 1$  に注意しつつ、 $\varepsilon_v(g\theta; \kappa, \mathbf{n}) = \varepsilon_v(g\theta^\sigma; \kappa, \mathbf{n})$  が言える。(証終)

この命題と Pullback formula により、

**命題 2.3**  $S_\kappa(\Gamma(\mathbf{n}))$  は、Fourier 係数が全て  $\mathbb{Q}$  に含まれる cuspform からなる basis  $\mathcal{B}_0$  をもつ。□

(証明)  $k = \mathbb{Q}$  とする。記述の簡便化の為、保型形式の classical な Fourier 展開表示を使う。式 (1.7) から、orthogoanal basis  $\mathcal{B} = \{f_j\}$  にたいして、

$$\omega_n(z, w) = \sum_{f_i} c_i f_i(z) f_i^\natural(w), \quad z, w \in \mathfrak{H}_n$$

となる。 $\mathbf{e}(Z) = \exp(2\pi i \text{Trace}(Z))$ ,  $Z \in M_n(\mathbb{C})$  として、これは

$$\sum_{S, T} A_{S, T} \mathbf{e}(Sz + Tw) = \sum_i c_i f_i(z) f_i^\natural(w).$$

ここで、Fourier 係数  $A_{S,T} \in \mathbb{Q}$  で  $S, T$  は positive semi-integral を走る。

$\beta_T^{(i)}$  を  $f_i^\natural$  の  $T$  での係数とすると、 $e(Tw)$  の Fourier 係数は

$$\sum_S A_{S,T} e(Sz) = \sum_i c_i f_i(z) \beta_T^{(i)}. \quad (2.8)$$

そこで、 $N = \dim_{\mathbb{C}} S_\kappa(\Gamma(\mathbf{n}))$  個の  $\{T_j\}$  を行列  $\Phi = \{c_i \beta_{T_j}^{(i)}\}_{1 \leq i, j \leq N}$  が可逆となる様を選ぶ。(選べる!  $c_i \neq 0$  に注意) このとき、式 (2.8) から、

$$\left( \sum_S A_{S,T_1} e(Sz), \dots, \sum_S A_{S,T_N} e(Sz) \right) = (f_1(z), \dots, f_N(z)) \Phi.$$

が得られ、左辺が望まれた basis  $\mathcal{B}_0$  である。 $k$  が一般の総実体の場合も同様。 (証終)

系として、次が得られる。

**系 2.4**  $f \in S_\kappa(\Gamma(\mathbf{n}))$  なら、任意の  $\sigma \in \text{Aut}(\mathbb{C}/\mathbb{Q})$  に対して  $f^\sigma \in S_\kappa(\Gamma(\mathbf{n}))$ 。  $\square$

(証明) 先の basis  $\mathcal{B}_0 = \{g_i\}_{1 \leq i \leq N}$  を用いて、 $f = \sum_i \alpha_i g_i$ ,  $\alpha_i \in \mathbb{C}$  と書く。すると、 $f^\sigma = (\sum_i \alpha_i g_i)^\sigma = \sum_i \alpha_i^\sigma g_i \in S_\kappa(\Gamma(\mathbf{n}))$ 。 (証終)

$\{\lambda^{(i)}\}$  を  $S_\kappa(\Gamma(\mathbf{n}))$  に付随する Satake parameter の集合として、 $S_\kappa(\Gamma(\mathbf{n}))$  を次の様に分解する。

$$\begin{aligned} S_\kappa(\Gamma(\mathbf{n})) &= \bigoplus_i V_{\lambda^{(i)}} \\ V_{\lambda^{(i)}} &= \bigoplus_{1 \leq j \leq j_{\lambda^{(i)}}} \mathbb{C} f_j^{\lambda^{(i)}} \end{aligned}$$

ここで、 $f_j^{\lambda^{(i)}}$  は  $\lambda^{(i)}$  に対応した Hecke eigenform である。

この分解と系 2.4 から、 $\mathbb{Q}(\lambda^{(i)})$  が有限次 (総実) 代数体である事もわかる。実際、module として

$$V_{\lambda^{(i)}} \overset{\sigma}{\simeq} V_{\lambda^{(i)}^\sigma} \simeq V_{(\lambda^{(i)})^\sigma} (\subset S_\kappa(\Gamma(\mathbf{n})))$$

が任意の  $\sigma \in \text{Aut}(\mathbb{C}/\mathbb{Q})$  に対して成立し、 $\dim_{\mathbb{C}} S_\kappa(\Gamma(\mathbf{n})) < \infty$  だからである。では、この節の主定理を示す。

**定理 2.5 (特殊値の Galois Equivalence Property)**  $\kappa, n: \text{even } \kappa > 2n+1, f \in S_\kappa^n(\Gamma(\mathbf{n}))$  で  $f$  の Fourier 係数は  $\mathbb{Q}(\lambda_f)$  に含まれると仮定する。このとき、

$$\frac{L_S(\kappa - n, f)}{\langle f, f \rangle \pi^{(2\kappa n + \kappa - 3n(n+1)/2)}} \in \mathbb{Q}(\lambda_f) \quad (2.9)$$

が成立し、任意の  $\sigma \in \text{Aut}(\mathbb{C}/\mathbb{Q})$  に対して次が成立する。

$$\left( \frac{L_S(\kappa - n, f)}{\langle f, f \rangle \pi^{(2\kappa n + \kappa - 3n(n+1)/2)}} \right)^\sigma = \frac{L_S(\kappa - n, f^\sigma)}{\langle f^\sigma, f^\sigma \rangle \pi^{(2\kappa n + \kappa - 3n(n+1)/2)}}. \quad (2.10)$$

$\square$

(証明)  $f = f_1$  を含む  $S_\kappa(\Gamma(\mathbf{n}))$  の Hecke eigenform からなる orthogonal basis  $\mathcal{B} = \{f_j\}$  をとる。定理 1.4 により

$$\omega_n(g_1, g_2) = \sum_{f_j \in \mathcal{B}} c_{\lambda_{f_j}} \frac{f_j(g_1) f_j^{\natural}(g_2)}{\langle f_j, f_j \rangle}. \quad (2.11)$$

$\sigma \in \text{Aut}(\mathbb{C}/\mathbb{Q})$  をこの両辺に作用させて、( $\omega_n$  の Fourier 係数は  $\mathbb{Q}$  に含まれる事を思い出しつつ)

$$\omega_n(g_1, g_2) = \omega_n(g_1, g_2)^\sigma = \sum_{f_j \in \mathcal{B}} (c_{\lambda_{f_j}})^\sigma \frac{f_j^\sigma(g_1) (f_j^\natural)^\sigma(g_2)}{(\langle f_j, f_j \rangle)^\sigma} \quad (2.12)$$

となる。

$\sigma \in \text{Aut}(\mathbb{C}/\mathbb{Q}(\lambda_f))$  として (2.11)=(2.12) の右辺と  $f(g_1) = f^\sigma(g_1)$  の Petersson 内積をとると、

$$c_{\lambda_f} f^{\natural}(g_2) = (c_{\lambda_f})^\sigma \frac{\langle f, f \rangle}{\langle f, f \rangle^\sigma} (f^{\natural})^\sigma(g_2) + \sum_{2 \leq j} (c_{\lambda_{f_j}})^\sigma \frac{\langle f_j^\sigma, f \rangle}{(\langle f_j, f_j \rangle)^\sigma} (f_j^\natural)^\sigma(g_2)$$

を得る。 $\{(f_j^\natural)^\sigma\}$  は線型独立で、 $f = f^{\natural} = (f^{\natural})^\sigma$  だから、 $c_{\lambda_f} = c_{\lambda_f}^\sigma \frac{\langle f, f \rangle}{\langle f, f \rangle^\sigma}$  となり、 $\frac{c_{\lambda_f}}{\langle f, f \rangle}$  が  $\sigma$  で不変である事がわかる。 $c_{\lambda_f}$  の値を代入することで (2.9) が導かれる。

以下、 $\sigma \in \text{Aut}(\mathbb{C}/\mathbb{Q})$  とする。 $f^\sigma = f'_1$  を含む orthogonal basis  $\mathcal{B}' = \{f'_j\}$  を用意する。やはり、定理 1.4 により

$$\omega_n(g_1, g_2) = \sum_{f'_j \in \mathcal{B}'} c_{\lambda_{f'_j}} \frac{f'_j(g_1) f'_j{}^{\natural}(g_2)}{\langle f'_j, f'_j \rangle}. \quad (2.13)$$

(2.12)=(2.13) の右辺と  $f'_1(g_1) = f^\sigma(g_1)$  の Petersson 内積をとると、

$$(c_{\lambda_f})^\sigma \frac{\langle f^\sigma, f^\sigma \rangle}{(\langle f, f \rangle)^\sigma} (f^{\natural})^\sigma(g_2) + \sum_{2 \leq j} (c_{\lambda_{f'_j}})^\sigma \frac{\langle f'_j^\sigma, f^\sigma \rangle}{(\langle f'_j, f'_j \rangle)^\sigma} (f'_j{}^{\natural})^\sigma(g_2) = c_{\lambda_f} (f^\sigma)^\natural(g_2)$$

を得る。 $(f$  の Fourier 係数は総実故、 $(f^\sigma)^\natural = (f^{\natural})^\sigma$  に注意しつつ、) $\{(f'_j{}^{\natural})^\sigma\}$  は線型独立なので、 $(c_{\lambda_f})^\sigma \frac{\langle f^\sigma, f^\sigma \rangle}{(\langle f, f \rangle)^\sigma} = c_{\lambda_f}$  を得、(2.10) が従う。 (証終)

**注意 2.6** 上の証明から  $\mathcal{B} = \{f_j\}$  が  $S_\kappa(\Gamma(\mathbf{n}))$  の (eigenforms の) orthogonal basis なら、 $\mathcal{B}^\sigma = \{f_j^\sigma\}$  も orthogonal basis.

**注意 2.7** 上の定理では Fourier 係数が  $\mathbb{Q}(\lambda_f)$  に含まれることを仮定したが、一般に空間  $V_{\lambda_f}$  は、全ての Fourier 係数が  $\mathbb{Q}(\lambda_f)$  に含まれる様な eigenforms で張れる事が次の補題からわかる。

**補題 2.8**  $\mathcal{K}(\subset \mathbb{C})$  を任意の体とし、 $V \subset \mathbb{C}^N$  を  $\mathbb{C}$  ベクトル空間で  $\text{Aut}(\mathbb{C}/\mathcal{K})$ -stable とする。 $(\text{Aut}(\mathbb{C}/\mathcal{K})$  はベクトルの各成分に作用させる。) このとき、 $V$  は  $\mathcal{K}$ -rational な basis を持つ。

(証明) 読者に任せる。

### 3 liftings, norm 商

まず、池田リフト、斎藤-黒川リフト、吉田リフトについて復習する。

**定理 3.1 (斎藤-黒川リフト (form Hilbert modular form) [15])**  $k$  を総実体、 $\varphi \in S_{2\kappa-2}(\Gamma(\mathbf{n}))$  を Hilbert modular Hecke eigenform とする。この時、次数 2 の  $k$  上の Hilbert Siegel Hecke eigenform  $f = SK(\varphi) \in S_{\kappa+n}(\Gamma(\mathbf{n}))$  で

$$L_S(s, f) = \zeta_{k,S}(s) Z_S(s + \kappa - 1, \varphi) Z_S(s + \kappa - 2, \varphi)$$

となるものが存在する。ここで、 $\zeta_k$  は  $k$  の Dedekind zeta 関数、 $Z_S(s, \varphi)$  は  $\varphi$  の通常の (degree 2 の) 保型  $L$ -関数。□

**定理 3.2 (池田リフト [10])**  $k = \mathbb{Q}$ ,  $\kappa, n: \text{even}$ ,  $\varphi \in S_{2\kappa-n}(\Gamma(1))$  を楕円 Hecke eigenform とする。この時、次数  $n$  の Siegel Hecke eigenform  $f = I(\varphi) \in S_{\kappa-n}(\Gamma(1))$  で

$$L(s, f) = \zeta(s) \prod_{j=1}^n Z(s + \kappa - j, \varphi)$$

となるものが構成できる。特に、 $n = 1$  のときは  $\mathbb{Q}$  上の斎藤-黒川リフト。□

上の 2 つの lift において、Satake parameter を比べる事で、 $\mathbb{Q}(\lambda_f) \subset \mathbb{Q}(\lambda_\varphi)$  がわかる。

**定理 3.3 (吉田リフト [18], Böcherer and Schulze-Pillot [3])**  $\kappa \geq 6: \text{even}$ ,  $q: \text{prime}$ ,  $\varphi_1 \in S_{2\kappa-2}(\Gamma_0(q))$ ,  $\varphi_2 \in S_2(\Gamma_0(q))$  を楕円 Hecke eigenform のペアで両者の保型形式  $L$ -関数  $Z_S(s, \varphi_i)$  の関数等式の符号は同じで newform とする。この時、次数 2 の Siegel Hecke eigenform  $f = Y(\varphi_1, \varphi_2) \in S_\kappa(\Gamma_0(q))$  で

$$L_S(s, f) = \zeta_S(s) L_S(s, \varphi_1 \otimes \varphi_2)$$

となるものが構成できる。ここで  $\otimes$  は Rankin-Selberg の convolution 積で、 $L_S(s, f_1 \otimes f_2)$  は  $s = 1/2$  で中心に持つように normalize させている。□

吉田リフトにおいては、 $\mathbb{Q}(\lambda_f) \subset \mathbb{Q}(\lambda_{\varphi_1})\mathbb{Q}(\lambda_{\varphi_2})$  がわかる。

では、これらのリフトにおいて、preimage と image の Petersson norm に関する商が G.E.P を持つ事を見ていく。

**定理 3.4 (Furusawa [5], Kohnen [11], Lanphier [13])**  $\kappa > 5$ ,  $f \in S_\kappa(\Gamma(\mathbf{n}))$  を  $\varphi$  の斎藤-黒川リフトで、両者の Fourier 係数は  $\mathbb{Q}(\lambda_\varphi)$  に含まれるとする。(c.f. 注意 2.7) このとき、 $\frac{\langle \varphi, \varphi \rangle}{\langle f, f \rangle} \in \mathbb{Q}(\lambda_\varphi)$  で

$$\left( \frac{\langle \varphi, \varphi \rangle}{\langle f, f \rangle} \right)^\sigma = \frac{\langle \varphi^\sigma, \varphi^\sigma \rangle}{\langle f^\sigma, f^\sigma \rangle}$$

が、任意の  $\sigma \in \text{Aut}(\mathbb{C}/\mathbb{Q})$  にたいして成立する。□

(証明) まず、 $n_1, n_2 \in \mathbb{Z}, m = [k : \mathbb{Q}]$  として

$$A_1(n_1, n_2, \varphi) = \frac{L_S(n_1, \varphi)L_S(n_2, \varphi)}{\langle \varphi, \varphi \rangle \pi^{m(n_1+n_2)}}, A_2(f) = \frac{L_S(\kappa-2, f)}{\langle f, f \rangle \pi^{(5\kappa-9)m}}$$

とおく。すると  $n_1 = 2\kappa - 3, n_2 = 2\kappa - 4$  として、定理 3.1 から

$$\begin{aligned} \frac{\langle \varphi, \varphi \rangle}{\langle f, f \rangle} &= \frac{L_S(2\kappa-3, \varphi)L_S(2\kappa-4, \varphi)}{\pi^{(4\kappa-7)m} A_1(2\kappa-3, 2\kappa-4, \varphi)} \cdot \frac{\pi^{(5\kappa-9)m} A_2(f)}{L_S(\kappa-2, f)} \\ &= \frac{A_2(f)}{A_1(2\kappa-3, 2\kappa-4, \varphi)} \cdot \frac{\pi^{(\kappa-2)m} L_S(2\kappa-3, \varphi)L_S(2\kappa-4, \varphi)}{\zeta_{k,S}(\kappa-2)L_S(2\kappa-3, \varphi)L_S(2\kappa-4, \varphi)} \\ &= \frac{A_2(f)}{A_1(2\kappa-3, 2\kappa-4, \varphi)} \cdot \frac{\pi^{(\kappa-2)m}}{\zeta_{k,S}(\kappa-2)} \end{aligned}$$

と計算できる。 $\frac{\pi^{(\kappa-2)m}}{\zeta_{k,S}(\kappa-2)} \in \mathbb{Q}$  (c.f [7]) で、定理 2.5 により  $A_2(f) \in \mathbb{Q}(\lambda_f) (\subset \mathbb{Q}(\lambda_\varphi))$  で  $A_2(f)^\sigma = A_2(f^\sigma), \sigma \in \text{Aut}(\mathbb{C}/\mathbb{Q})$  である。

更に、 $n_1 + n_2$  が odd ならば  $A_1(n_1, n_2, \varphi) \in \mathbb{Q}(\lambda_\varphi)$  で

$$A_1(n_1, n_2, \varphi)^\sigma = A_1(n_1, n_2, \varphi^\sigma), \sigma \in \text{Aut}(\mathbb{C}/\mathbb{Q})$$

である事が [16] により知られている。これらの事から我々の主張が従う。 (証終)

**定理 3.5 (Choie and Kohnen [4], Lanphier [13])**  $f \in S_\kappa(\Gamma(1))$  を  $\varphi \in S_{2\kappa-n}(\Gamma(1))$  の次数  $n$  の池田リフトで、両者の Fourier 係数は  $\mathbb{Q}(\lambda_\varphi)$  に含まれるとする。

このとき、 $\frac{\langle \varphi, \varphi \rangle^{n/2}}{\langle f, f \rangle} \in \mathbb{Q}(\lambda_\varphi)$  で

$$\left( \frac{\langle \varphi, \varphi \rangle^{n/2}}{\langle f, f \rangle} \right)^\sigma = \frac{\langle \varphi^\sigma, \varphi^\sigma \rangle^{n/2}}{\langle f^\sigma, f^\sigma \rangle}$$

が任意の  $\sigma \in \text{Aut}(\mathbb{C}/\mathbb{Q})$  にたいして成立する。  $\square$

(証明)  $A_1(n_1, n_2, \varphi)$  を定理 3.4 の証明と同じとして、

$$A_n(f) = \frac{L(\kappa-n, f)}{\langle f, f \rangle \pi^{(2\kappa+1)n - \frac{3n(n+1)}{2}}}$$

とおく。定理 3.2 から

$$\begin{aligned} \frac{\langle \varphi, \varphi \rangle^{n/2}}{\langle f, f \rangle} &= \frac{A_n(f) \pi^{(2\kappa+1)n - \frac{3n(n+1)}{2}}}{L(\kappa-n, f)} \cdot \langle \varphi, \varphi \rangle^{\frac{n}{2}} \\ &= \frac{A_n(f) \pi^{(2\kappa+1)n - \frac{3n(n+1)}{2}}}{\zeta(\kappa-n) \prod_{j=1}^n Z(2\kappa-n-j, \varphi)} \cdot \langle \varphi, \varphi \rangle^{\frac{n}{2}} \\ &= \frac{\pi^{\kappa-n}}{\zeta(\kappa-n)} \cdot \frac{A_n(f) \pi^{2\kappa n - \frac{(3n^2+n)}{2}}}{\prod_{\substack{j=1 \\ j:\text{odd}}}^{n-1} Z(2\kappa-n-j, \varphi) Z(2\kappa-n-j-1, \varphi)} \cdot \langle \varphi, \varphi \rangle^{\frac{n}{2}} \\ &= \frac{\pi^{\kappa-n}}{\zeta(\kappa-n)} \cdot \frac{A_n(f) \pi^{2\kappa n - \frac{(3n^2+n)}{2}}}{\prod_{\substack{j=1 \\ j:\text{odd}}}^{n-1} \left( A_1(2\kappa-n-j, 2\kappa-n-j-1, \varphi) \langle \varphi, \varphi \rangle^{\pi^{4\kappa-2n-2i-1}} \right)} \cdot \langle \varphi, \varphi \rangle^{\frac{n}{2}} \\ &= \frac{\pi^{\kappa-n}}{\zeta(\kappa-n)} \cdot \frac{A_n(f)}{\prod_{\substack{j=1 \\ j:\text{odd}}}^{n-1} \left( A_1(2\kappa-n-j, 2\kappa-n-j-1, \varphi) \right)} \end{aligned}$$

と計算できて、 $\frac{\pi^{\kappa-n}}{\zeta(\kappa-n)} \in \mathbb{Q}$  で、定理 2.5 から、 $A_n(f) \in \mathbb{Q}(\lambda_f) \subset \mathbb{Q}(\lambda_\varphi)$  で G.E.P を持つ ( $A_1(n_1, n_2, \varphi)$  も) 事から、我々の主張が得られる。 (証終)

**定理 3.6**  $\kappa \geq 6$ : even,  $\varphi_1 \in S_{2\kappa-2}(\Gamma_0(q)), \varphi_2 \in S_2(\Gamma_0(q))$  とする。  $f = Y(\varphi_1, \varphi_2)$  に対して、 $\frac{\langle \varphi_1, \varphi_1 \rangle}{\langle f, f \rangle \pi^{11-6\kappa}} \in \mathbb{Q}(\varphi_1, \varphi_2)$  で

$$\left( \frac{\langle \varphi_1, \varphi_1 \rangle}{\langle f, f \rangle} \right)^\sigma = \frac{\langle \varphi_1^\sigma, \varphi_1^\sigma \rangle}{\langle f^\sigma, f^\sigma \rangle}$$

が任意の  $\sigma \in \text{Aut}(\mathbb{C}/\mathbb{Q})$  にたいして、成立する。 □

(証明)  $\frac{L_S(\kappa-3, \varphi_1 \otimes \varphi_2)}{\langle \varphi_1, \varphi_1 \rangle} \in \mathbb{Q}(\lambda_{\varphi_1})\mathbb{Q}(\lambda_{\varphi_2})$  の G.E.P (c.f. p. 191 [7]) を用いて上の二定理同様に証明出来る。

## 参考文献

- [1] S. Böcherer: Über die Funktionalgleichung automorpher  $L$ -Functionen zur Siegelischen Modulgruppe, J. Reine Angew. Math. **362**(1985) 146-168.
- [2] —: Ein Rationalitätssatz für formale Hecke-Reihen zur Siegelischen Modulgruppe, Abh. Math. Sem. Univ. Hamburg. **56** (1986) 35-47.
- [3] S. Böcherer and R. Schulze-Pillot: Siegel modular forms and theta series attached to quaternion algebras II, Nagoya Math. J. **147** (1997) 71-106.
- [4] Y. Choie and W. Kohnen: On the Petersson norm of certain Siegel modular forms, Ramanujan. J. The Rankin Special Issue **7** (2003) 47-49.
- [5] M. Furusawa: On the Petersson norms for some Liftings, Math. Ann. **267** (1984) 543-548.
- [6] P. Garrett: Integral Representations of Eisenstein series and  $L$ -functions, in Number Theory, Trace Formulas and Discrete Groups. (1987) 241-264.
- [7] —: *Holomorphic Hilbert modular forms*, Brooks/Cole.
- [8] —: On the arithmetic of Siegel-Hilbert Modular cuspforms: Petersson inner products and Fourier coefficients, Invent. Math. **107**(1992) 453-481.
- [9] M. Harris: Eisenstein series and Shimura varieties, Ann. of Math. **119** (1984) 59-94.
- [10] T. Ikeda: On the lifting of elliptic cusp forms to Siegel cusp forms of degree  $2n$ , Ann. of Math. **154**(2001) 641-681.
- [11] W. Kohnen: On the Petersson norm of a Siegel-Hecke eigen form of degree 2 in the Maass space, J. Reine Angew. Math. **357**(1985) 96-100.

- [12] J. Kuang: On the linear representability of Hilbert-Siegel modular forms by theta series, Amer. J. Math. **116** (1994) 921-994.
- [13] D. Lanphier: Petersson norms and liftings of Hilbert modular forms, J. Number Theory. **106** (2004) 238-258.
- [14] T. Moriyama: this volume.
- [15] R. Schmidt: The Saito-Kurokawa lifting and Functoriaity, Amer. J. Math. **127**(2005) 209-240.
- [16] G. Shimura: The special value of the zeta functions associated with Hilbert modular forms, Duke Math. J. **50**(1978) 637-679.
- [17] T. Sugano: Hecke 環と  $L$ -関数, サマースクール第 5 回, (1997) 74-93.
- [18] H. Yoshida: Siegel's modular forms and the arithmetics of quadratic forms, Invent. Math. **60** (1980) 193-248.